

令和 6 年 6 月 3 日現在

機関番号：22604
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2023
課題番号：17K04317
研究課題名（和文）行動プライミングの進化的アプローチからの再検討

研究課題名（英文）Re-examination of behavioral priming from the evolutionary perspective.

研究代表者

沼崎 誠（Numazaki, Makoto）

東京都立大学・人文科学研究科・教授

研究者番号：10228273

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：プライムが環境情報の手がかりとして機能する行動プライミング研究を再検討した。異性愛プライムが認知や行動に及ぼす影響、外見に注目させるプライムが性役割的偏見とジェンダー関連自己ステレオタイプ化に及ぼす影響、環境の危険性を示唆するプライムが攻撃行動に及ぼす影響を、複数の実験をおこない検討した。一連の研究から、行動プライミング現象が存在することだけでなく、ある種の行動プライミング現象は、プライムが環境に関する情報の手がかりとして機能し、各個人にとって適切な行動の準備状態を形成し、行動が起こりやすくなることで説明できると主張するアフォーダンスモデルが有効であることも示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

先行する概念や社会的カテゴリーの情報処理が行動を変化させるという行動プライミング現象について詳細に再検討をおこなった。進化アプローチの基本動機理論に基づく複数の実証研究から、先行する概念や社会的カテゴリーの情報処理が、環境に関する情報として機能する場合には、各個人にとって適切な行動の準備状態が形成され、その環境に適切な行動が起こりやすくなることが示された。

研究成果の概要（英文）：The present research reexamined behavior priming phenomenon in which prime acts as a cue for information about the environment. We conducted multiple experiments to investigate the effects of heterosexual primes on cognition and behavior, the effects of primes focusing on one's appearance on sexism and gender-related self-stereotyping, and the effects of primes suggesting the environment as dangerous on aggressive behavior. These experiments had demonstrated not only the existence of behavioral priming phenomena, but also the effectiveness of the affordance model that argued that certain behavior priming phenomena can be explained by the fact that the prime acts as a cue for information about the environment, forming a readiness for an appropriate behavior for each person, and making it easier for behavior to occur.

研究分野：社会心理学

キーワード：社会系心理学 行動の自動性 進化心理学 プライミング効果 異性愛 攻撃行動

3. 研究報告内容

1. 研究開始当初の背景

2010年代以降、心理学において再現性に関わる議論が広く行われている。再現性がないと批判の対象となる重要な領域の一つとして行動プライミング研究（プライミングによって行動が変化する現象）がある。行動プライミングが生じる心理メカニズムとして、知覚した概念が直接行動表象を活性化させるため行動が生じるとするイディオモーター仮説、抽象概念が身体的な表象によって理解されるため行動が生じやすくなるとするメタファー・モデル、知覚した概念が状況に関する手がかりになるためその状況にふさわしい行動が生じやすくなるとするアフォーダンス・モデル、など複数のメカニズムが指摘されていた（Bargh, 2007）。そのため、それらを全て否定するのは不適切であり、プライムが状況の手がかりとなるタイプの行動の自動性は再現可能なのではないかという議論もなされていた（Cesario, 2014）。しかし、このようなタイプの行動プライミングでも再現性がないという報告もあり（Shanks, et. al., 2015）、行動プライミングの存在に関して多くの議論がなされていた。

2. 研究の目的

本研究は、行動プライミングに対する批判に対して、申請者がこれまで行ってきた研究蓄積を活かし、再検討をおこなった。進化アプローチの基本動機理論に基づき、プライムが状況の手がかりとして機能し、その状況に適した行動の準備状態が形成され、行動が変化するタイプの研究を綿密に再検討した。再現性がないという結果が報告されている異性愛プライムが認知や行動に及ぼす効果を検討した（研究 1）。さらに、異性愛の顕現化と密接に関連する身体注目プライムが性別的偏見に及ぼす効果、そして、ジェンダー関連自己概念に及ぼす効果を検討した（研究 2）。アフォーダンス・モデルで研究が行われていた、環境が危険であることを示唆するプライムが攻撃・防衛行動に及ぼす効果を検討した（研究 3）。これらの研究の中で、プライムが行動に影響を及ぼす過程における媒介要因として、自己表象の変化や感情の変化なども検討した。当初の計画にはなかったが、研究実施期間に Covid-19 が蔓延し計画した個別実験を行う研究などの実施が困難となったため、基本動機理論に関連する、環境悪化プライムや感染症回避に関する研究も実施した（研究 4, 5）。

3. 研究の方法

文献研究をおこないながら、おもに実験を用いて実証的検討をおこなった。実証研究の具体的手続きは、研究成果と合わせて報告する。

4. 研究成果

(1) 異性愛顕現化が行動や関連する認知に及ぼす効果

異性愛の顕現化が行動やその行動に関連する認知に及ぼす効果について、異性愛のプライミング方法を確立し、研究実施方法の違いを含めて検討した。

研究 1-1 では、プライミングによって異性愛が顕現化したときの認知や行動の変化を検討するために必要な、多くの研究実施方法で使用できる、長期配偶と短期配偶を区別して顕現化させるプライミング手法の確立を目指した。研究 1-2-3 の長期配偶プライミングと短期配偶プライミングの操作で得られた自由記述データを利用して、長期配偶と短期配偶プライミングが妥当であったかを確認した。長期配偶 (vs. 短期配偶) プライミングの方法として、「結婚生活を一緒に送りたい (vs. 抱きたい/抱かれない) 著名人/有名人/芸能人を〇名挙げてください」と教示し回答させた後で、「誰かと結婚生活を一緒に送りたい (vs. 誰かを抱きたい/誰かに抱かれない) と思う条件を〇つ挙げてください」と教示して条件をリストアップさせた。条件の自由記述を KH-Coder を用いて分析をおこなった。男性の長期配偶関係に望む条件の特徴的な点は、「気楽」「楽しい」「愛情客体」といった『関係』に関わるコードの出現率が高いことに加え、「家事」「家庭」といった『家庭』に関わるコードと『身体』に含まれる「美しい」コードの出現率が高いことであった。男性の短期配偶関係に望む条件の特徴的な点は、「美しい」「セクシー」「清潔」といった『身体』に関わるコードと「女らしい」といった『身体性格両方』に関わるコードの出現率が高いことであった。女性の長期配偶関係に望む条件の特徴的な点は、「温かい」や「社会的望ましさ」といった『性格』に関わるコードと、「気楽」「愛情客体」といった『関係』に関わるコードの出現率が高いことに加え、『社会経済的地位』や『家庭』に含まれる「子ども好き」コードの出現率が高いことであった。女性の短期配偶関係に望む条件の特徴的な点は、「温かい」コードに加えて、「美しい」「力強い」「セクシー」といった『身体』に関わるコードと「愛情主体」コードの出現率が高いことであった。これらの結果は、性的戦略理論や先行研究の知見と一致する結果であり、操作の妥当性を保証するものであった。

研究 1-2 では、異性愛プライミングの効果を、様々な研究サンプルを対象に複数の研究実施方法で検討した。再現性の問題で指摘された研究実践の改善点の一つは、十分な参加者を確保して検定力を高くした研究の必要性である。そのため、個別の実験室実験の実施が難しくなり、クラウドソーシングを用いて参加者を集めたり、Web 上での実験に参加させたりすることが多くなっている。これらの研究実施方法では、実験室での実験に比べ相対的に状況の統制が難しく、効果を検出するのが難しいかもしれない。このことから、複数の実施方法で実験をおこない効果が違いが見られるかも探索的に検討した。効果がみられるかを検討する手段として、先行研究で効果が見られていた複数の行動及び認知を測定し、第 1 種の錯誤を防ぐために結果の出にくい形での分析を実施した。操作に無回答の参加者も分析の対象とし、直行回転で無相関の因子得点を算出し、この因子得点を被説明変数として投入する MANOVA を実施した。

研究 1-2-1 では、東京の私立大学で男女が出席している大教室での授業中に質問紙を用いて実験を実施した。独立変数は配偶プライム(長期配偶条件 vs. 短期配偶プライム条件 vs. 統制条件)と参加者の性であった。従属変数として、1)リスクテイキング課題(獲得) 2)時間割引課題 3)損出回避課題 4)リスクテイキング尺度 5)慈愛的偏見尺度 6)経済豊かさの重視項目 7)集団暴力の肯定項目 8)美容のためのリスクテイキング項目 9)子ども・赤ちゃんへの態度項目 10)ヒロイックな援助項目、に回答させた。10 指標を因子分析(初期解最尤法バリマックス回転)にかけてところ 4 因子が抽出され因子得点を求めた。この得点に対して配偶プライム×性の MANOVA をおこなったところ、性の主効果が有意であったが、条件の主効果は有意に近い効果にとどまり、交互作用は有意ではなかった。異性愛プライミングに効果があるとはいえない結果であった。

研究 1-2-2 では、配偶方略に関わる個人差を要因に入れた実験をおこなった。生活史方略の個人差を測定する個人差尺度(Mini-K)を含むテスト・バッテリーを実施していた、東京の公立大学の科目において、男女が出席している大教室の授業中に質問紙を用いて実験を実施した。従属変数は研究 1-2-1 と同じであった。10 指標を因子分析にかけて抽出された 5 因子得点に対して、配偶プライム×性×生活史方略(連続変数)の MANOVA をおこなったところ、性の主効果に加えて Mini-K 主効果が有意であったが、配偶プライムを含む効果に有意な効果は見られず、異性愛プライミングに効果がある証拠は得られなかった。

研究 1-2-3 は、配偶方略の個人差を要因にいれ同性のみがいる実験室において実験をおこなった。Mini-K を含むテスト・バッテリーを実施していた東京の公立大学の男女大学生を、同性の参加者のみを実験室に集めて、同性の実験者が実験を実施した。従属変数は研究 1-2-1 の指標に加えて、リスクテイキング課題(損出)、顕示的消費項目、優しさ呈示の寄付行為項目、にも回答させた。12 指標を因子分析にかけて抽出された 5 因子得点に対して、配偶プライム×性×生活史方略(連続変数)の MANOVA をおこなった。性の主効果と Mini-K の主効果が有意で、条件の主効果に有意に近い効果が見られた。さらに、性×条件×Mini-K の交互作用も有意であった。行動を測定するリスクテイキング課題の指標を見ても、性×条件×Mini-K の交互作用が見られ、遅い配偶方略を取る男性は統制条件に比べて短期配偶条件でリスクテイキングが高く、速い配偶方略をとる女性は統制条件や長期配偶条件に比べて短期配偶方略でリスクテイキングが高かった。この結果は、個人差を考慮して短期配偶と長期配偶プライミングを区別し、同性のみが存在する統制しやすい実験室で実施すれば、配偶プライミングによる行動プライミング効果を検出することができることを示すものであった。

研究 1-2-4 は、実験室で質問紙を用いるのではなく、自宅から Web にアクセスして参加する実験をおこなった。Mini-K を含むテスト・バッテリーを実施していた東京の公立大学の男女大学生に対して、自宅から Web 実験に参加するように依頼した。従属変数は研究 1-2-1 と同じであった。10 指標を因子分析にかけて抽出された 4 因子得点に対して、配偶プライム×性×生活史方略(連続変数)の MANOVA をおこなった。Mini-K の効果が有意であったが、配偶プライム×Mini-K の交互作用と性×配偶プライム×Mini-K の交互作用は有意に近い効果にとどまり、明確な結果は得られなかった。

研究 1-2-5 は、大学生サンプルではなくクラウド・ソーシングサイトから 18 歳から 39 歳の男女参加者を募集し Web 実験をおこなった。参加者属性以外に研究 1-2-4 と異なる点は、個人差を従属変数の測定後に測定した点、従属変数を減らした点である。9 指標を因子分析にかけて抽出された 4 因子得点に対して、配偶プライム×性×生活史方略(連続変数)の MANOVA をおこなった。性の主効果と Mini-K の主効果、Mini-K×性の交互作用が有意であったが、配偶プライムを含む効果に有意な効果は見られず、異性愛プライミングに効果があるという証拠は得られなかった。

研究 1-3 では、大学生参加者を研究実施方法のタイプ(実験室での Web 実験 vs. 自宅での Web 実験)にランダム割り当てをして、研究実施方法によって、短期配偶プライミングの効果に差が見られるかを検討した(参加者数の関係から長期配偶プライミングは条件に加えることができなかった)。どちらの研究場所であっても、Web の指定されたサイトに入り回答する形で実験をおこなった。従属変数は研究 1-2-4 と同じであった。9 指標を因子分析にかけて抽出された 4 因子得点に対して、性×条件×実施方法×Mini-K の MANOVA をおこなった。性の主効果と Mini-K の主効果、配偶プライム×Mini-K と性×Mini-K と実施方法×Mini-K と性×実施方法×Mini-K と性×実施方法×条件×Mini-K の交互作用に有意または有意に近い効果が見られた。研究実施方法によって配偶プライムの効果が異なることを示唆する結果は得られたものの、状況の統制が容易である実験室で実施すると効果が見られやすいといったパターンではなかった。

(2) 身体への注目が慈愛的偏見とジェンダー関連自己ステレオタイプ化に及ぼす効果

研究 2 では、プライミングとして、異性愛に関連する自己の身体への注目を取り上げ、研究 1 でも検討した慈愛的偏見に焦点を当て効果を検討した。また、ジェンダー関連自己ステレオタイプ化に及ぼす効果も検討した。自分の身体に注目することはジェンダー・アイデンティティに合致した、異性愛の対象として望まれる、理想的な身体イメージを活性化させる。その活性化されたイメージは伝統的な性別意識と合致し、それを促進させると考えられる。自己の身体へ注目すると、慈愛的偏見が強まりジェンダーに関する自己ステレオタイプ化が促進されるだろうという仮説をたてた。この仮説を検証するため、オンラインショッピング場面を用いた 3 つの実験を、男女大学生を参加者として実施した。研究 2-1 では顕在的慈愛的偏見と顕在的自己ステレオタイプ化を、研究 2-2、2-3 では潜在的自己ステレオタイプ化を従属変数として測定した。

研究 2-1 では男女大学生を参加者とし、身体注目条件と統制条件を設けた。身体注目条件では水着を購入・着用する場面を、統制条件ではスニーカーを購入・着用する場面を、商品の写真を見せながら想定させた。複数の商品の中、最も自分に似合いそうなものを選ぶ課題を 6 回繰り返した。その後、女性に関する両面価値的な性差別尺度と顕在的自己ステレオタイプ化を従属変数として測定した。その結果、男性参加者でも女性参加者でも、統制条件に比べ身体注目条件では、女性に対する慈愛的偏見が高まった。一方、敵意的偏見には違いは見られなかった。顕在的自己ステレオタイプ化においては、身体注目条件において男性は作動的と、女性は共同的と回答するジェンダー関連自己ステレオタイプ化を示す方向の平均値は得られたが、条件間の差は有意に近い効果にとどまった。

研究 2-2 では女子大学生のみを参加者とし、自己の身体への注目の操作を強めるために、参加者の顔写真とイラストの体型図から構成されるアバターを用いて実験を実施した。身体注目条件では、最も自分に似合いそうな服装（露出度の高いトップスやスカート、水着）を自分のアバターに試着する課題（アバター課題）を 4 回繰り返させた後、SC-IAT (Single Category Implicit Association Test) を用い、潜在的ジェンダー関連自己ステレオタイプ化を測定した。統制条件では SC-IAT を先に実施してからアバター課題を行わせた。その結果、統制条件に比べ身体注目条件の参加者では、共同性高ポジティブ特性（女性ステレオタイプの特性）と自己との連合が作動性高ポジティブ特性（男性ステレオタイプの特性）と自己との連合に比べて強く、ジェンダー関連自己ステレオタイプ化が生じていた。

研究 2-3 では男女大学生を参加者とし、研究 2-2 の結果が再現されるのか、男性でも見られるのかを検討した。実験は全てオンラインでおこない、研究 2-2 とほぼ同様の手続きで実施した。その結果、身体注目条件の参加者は統制条件に比べ、男性参加者では作動性高ポジティブ特性と自己との連合が強く、女性参加者では共同性高ポジティブ特性と自己との連合が強く、男性でも女性でも、ジェンダー関連自己ステレオタイプ化が生じていた。

これらの 3 つの研究は、直接行動を測定したものではないが、身体への注目を促すプライミングが、伝統的なジェンダー・ステレオタイプの方角に自己概念を変容させること、伝統的性役割的な態度を持つようになることを示しており、これらの変化によって行動が変化する可能性を示唆するものであった。

(3) 環境の危険を示唆する手がかりのプライミングが攻撃・防衛行動に及ぼす効果

研究 3 では、環境の危険性を示唆する手がかりとなるプライムが攻撃・防衛行動に及ぼす効果を検討した。アフォーダンス・モデルから、プライミングによって環境が危険であるという手がかりが与えられると、男性の攻撃行動や防衛行動が増えるであろう、個人差と状況によってプライムの影響が異なるであろう、という仮説を設けた。

研究 3-1 では男性を参加者として、攻撃または防衛概念の閾下プライミングが攻撃行動や防衛行動を引き起こすかを、狭い空間で検討した。語彙判断課題によって、攻撃概念か防衛/逃走概念か無関連概念をプライムした。その後、参加者は、他の参加者（実際はプログラムされた架空人物）とのインターアクションがとれる PC ゲームに参加した。ゲームの中では、自分のポイントを増やす行動、他者のポイントを減少させる攻撃行動、他者からの攻撃を防ぐ防衛行動、の 3 つの行動を取る機会が与えられた。3 つの行動の割合を求め、攻撃行動と防衛行動の指標とした。結果として、身体サイズに関する自己評価の個人差の調整効果が見られ、身体が大きいと自己知覚する参加者では、防衛/逃走プライム条件や統制条件に比べ攻撃プライム条件において攻撃行動の割合が高かった。一方、身体が小さいと自己知覚する参加者では、防衛/逃走プライム条件や統制条件に比べ攻撃プライム条件において攻撃行動の割合が低かった。

研究 3-2 では男性を参加者として、研究 3-1 で見られた効果が、実験実施場所の広さにより調整されるかを検討した。実験は狭い空間か広い空間かのいずれかでおこない、語彙判断課題の実施中に、攻撃的人物（危険プライム条件）か非攻撃的人物（統制条件）の写真のいずれかをプライム刺激として呈示した。その後、研究 3-1 とほぼ同様のゲームによって従属変数を測定した。狭い空間条件では、研究 3-1 の結果が再現し、身体が大きいと自己知覚する参加者では、統制条件に比べ危険プライム条件において攻撃行動の割合が高く、身体が小さいと自己知覚する参加者では、統制条件に比べ危険プライム条件において攻撃行動の割合が低かった。一方、広い空間条件では、プライミングの効果は見られなかった。

研究 3 では、従属変数として攻撃・防衛行動を測定し、行動プライミングを直接検証した。逃走が困難な狭い空間において、環境が危険であると示唆する手がかりがプライムされると、身体能力が高いと自己を認識している男性においてのみ攻撃行動が高まることが示された。この結果は、行動プライミングが存在することを示唆するだけでなく、プライムが状況の手がかりとして機能し、各個人ごとに異なる、状況に適した行動の準備状態が形成され、行動が発現しやすくなるというアフォーダンス・モデルの有効性を示唆するものであった。

(4) 環境悪化プライムが妬み感情と行動意図に及ぼす効果

研究 4 では、環境が悪化するという情報をプライミングすると、成功者に対するネガティブ感情である悪性妬み感情が変化するかを 2 つの実験をおこない検討した。

研究 4-1 では、乱文構成課題によって、環境悪化概念 (vs. 統制) をプライムとして呈示した。その後、友人が 50 万円獲得したというシナリオを読ませ、友人の成功を内的要因 (e.g., 努力) に帰属した程度と、悪性妬み感情を感じた程度などに回答させた。他者の成功を内的要因に帰属するほど悪性妬み感情が弱まるという効果は、統制条件においてのみ見られ、環境悪化プライム

条件では見られなかった。この結果は、環境悪化プライムが悪性妬み感情を強めることで、他者の成功を内的要因に帰属した場合でも、外的要因（e.g., 運の良さ）に帰属した場合と同程度の強さの悪性妬み感情が生じたことを示唆している。

研究 4-2 では、記憶課題によって環境悪化概念（vs. 統制）をプライムとして提示した。具体的には、環境悪化プライム条件では不況に関するネガティブな文章を、統制条件では自動車事故に関するネガティブな文章を記憶させた。その後、Twitter のフォロワーが 30 万円獲得したというシナリオを読ませた。そのフォロワーは、成功者との関係性が近い条件では同じ大学の趣味の合う同性の友人であるという情報を、成功者との関係性が遠い条件では年齢・性別・趣味が自分と同じ知らない人という情報をシナリオに含めた。シナリオを読ませた後で、悪性妬み感情を感じた程度などに回答させた。他者との関係性が遠い場合は近い場合よりも悪性妬み感情が弱まるという効果は、統制条件においてのみ見られ、環境悪化プライム条件では見られなかった。この結果は、環境悪化プライムが悪性妬み感情を強めることで、他者との関係性が遠い場合でも、近い場合と同程度の強さの悪性妬み感情が生じたことを示唆している。

上記 2 つの実験の結果は、環境が悪化するという状況に関する情報が顕現化すると、優れた他者に対するネガティブ感情が変化することを示唆する。これらの研究は場面想定法による研究であるため行動レベルまでの効果は測定できなかったが、プライムが状況手がかりとして働くこと、特定他者に対して感情生起が変化し、行動が変化する可能性を示唆するものである。

(5) Covid-19 の蔓延と感染脆弱意識の長期的変化

研究 5 では、当初の計画にはなかったが、Covid-19 の蔓延を感染症プライミングと捉え、感染脆弱意識の変化を質問紙調査により検討した。東京の公立大学の一般教養科目で、パンデミック前からパンデミック中にも実施したテスト・バッテリーのデータを用いて分析をおこなった。本研究の主要な目的は、パンデミック前、パンデミック中の 2020 年、ワクチンの接種が始まりながらも感染者の増減を繰り返していた 2021 年までのデータを用いて、感染脆弱意識とその下位因子の推移を検討することにあつた。さらに、パンデミック前とパンデミック中で感染脆弱意識とその下位因子と生活史方略の関係を探索的に検討した。分析の結果、以下の結果が得られた。① 感染嫌悪は、先行研究と同様にパンデミック前に比べパンデミックの開始直後（2020 年 6 月）から高まっていた。さらに、パンデミックが長期化した後（2021 年）でも高まった状態のままであった。一方、易感染性は、先行研究と同様にパンデミックの開始直後（2020 年 6 月）では、ほとんど変化が見られなかった。しかし、パンデミックが長期化すると、易感染性の得点もじわじわと上昇し、パンデミック以前に比べ 2021 年度では有意に高まっていることが示された。② 感染脆弱意識と Mini-K 得点（遅い方略（vs. 早い方略）をどの程度取っているかの指標）の関係も、測定時期によって、そして性別によってパターンが大きく異なっていた。男性においては、感染脆弱意識と生活史方略の関係に、パンデミック以前とパンデミック中で大きな変化は見られず、有意な関係も見られなかった。しかし、女性では、パンデミック以前では感染脆弱意識と生活史方略との関係が見られていなかったものが、パンデミック開始 1 年目である 2020 年では、遅い方略を取っている女性ほど感染脆弱意識が高いという関係が見られ、パンデミック開始 2 年目である 2021 年では、遅い方略を取っている女性ほど感染脆弱意識が低いという関係が見られた。ここから、遅い方略を取っている女性は、パンデミック開始 1 年目で感染脆弱意識が急激に高まり行動免疫システムが作動しやすくなり、2 年目では感染脆弱意識が低下しパンデミック前の水準まで戻っていた。一方、早い方略を取っている女性では、パンデミック開始 1 年目では感染脆弱意識はほとんど変化がなかったが、2 年目では感染脆弱意識が高まり行動免疫システムが作動しやすくなった。これらの結果は、パンデミックにおける感染症に関わる心理的メカニズムを検討するためには、短期的な研究だけでなく長期的な変化を追った研究の必要性を示唆するものであった。

一連の研究の成果をまとめると、プライムが状況の手がかりとして機能し、各個人にとってその状況に適した行動の準備状態が形成され、行動が生じやすくなるという、行動プライミングのアフォーダンス・モデルの有効性を支持する結果が得られたといえよう。この知見は、最近のレビューとも一致している（Dai et al., 2023）。しかし、研究実施方法によって行動プライミングの効果が異なるかについては明確な結果は得られず、複雑な心理メカニズムを検出するにはどのような研究実施方法が必要なのかについて明らかにするためにさらなる研究が必要であろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 沼崎誠・中井彩香・Li Yifei・朴建映・松崎圭佑	4. 巻 519-4
2. 論文標題 中間報告：日本におけるCOVID-19 パンデミック状況下における感染脆弱意識（2020-21年） 2019年以前との比較・Mini-K との関係の変化	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 東京都立大学人文学報	6. 最初と最後の頁 17-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 沼崎誠	4. 巻 87
2. 論文標題 適応的機能から見る自尊心	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 心理学ワールド	6. 最初と最後の頁 27 - 28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 沼崎誠・天野陽一・松崎圭佑・中井彩香	4. 巻 515-4
2. 論文標題 長期配偶相手と短期配偶相手および同性友人に望む条件 - 配偶者獲得動機のプライミング手法としての検討 -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 首都大学東京 人文学報	6. 最初と最後の頁 11-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 沼崎 誠	4. 巻 60
2. 論文標題 異性愛と社会的認知および社会的行動の性差	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 心理学評論	6. 最初と最後の頁 23-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24602/sjpr.60.1_23	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計14件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 6件）

1. 発表者名 沼崎誠・中井彩香・Li Yifei・朴建映・松崎圭佑
2. 発表標題 新型コロナウイルスパンデミック状況下における感染脆弱意識2 - 2020/2021 年度とそれ以前との比較および生活史方略との関係の変化 -
3. 学会等名 日本社会心理学会第63 回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 中井彩香・沼崎誠
2. 発表標題 不況プライムは金銭的成功者への悪性妬みに影響を与えるか？
3. 学会等名 第40 回日本生理心理学会大会日本感情心理学会第30 回大会合同大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 沼崎誠・中井彩香・Li Yifei・朴建映・松崎圭佑
2. 発表標題 新型コロナウイルスパンデミック状況下における感染脆弱意識 - 2020年度以前の比較と生活史方略との関係の変化 -
3. 学会等名 日本社会心理学会第62回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 朴建映・沼崎誠
2. 発表標題 自己モノ化が自己モノ化が潜在的自己ステレオタイプ化に及ぼす影響 IATを用いたジェンダーステレオタイプ化の検討
3. 学会等名 日本社会心理学会第62回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Park, K. & Numazaki, M.
2. 発表標題 Swimsuits make you internalize the gender stereotype: Self-objectification and gender self-stereotyping for women.
3. 学会等名 Society of Personality and Social Psychology 2021 Virtual Convention (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 沼崎誠・天野陽一・松崎圭佑・中井彩香
2. 発表標題 長期配偶相手と短期配偶相手および同性友人に望む条件
3. 学会等名 日本心理学会第83回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Li, Y., & Numazaki, M.
2. 発表標題 Ecological factors as moderators of the relationship between aggression priming and aggressive and defensive behavior.
3. 学会等名 The 21st annual Society of Personality and Social Psychology conference (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Park, K., & Numazaki, M.
2. 発表標題 Can self-objectification affect sexism? Effect of self-objectification on benevolent sexism and gender-related self-stereotyping in Japan.
3. 学会等名 The 21st annual Society of Personality and Social Psychology conference (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 沼崎誠・天野陽一・松崎圭佑・中井彩香
2. 発表標題 配偶者獲得動機の顕現化は社会的行動や判断に影響を及ぼさないのか？ 配偶形態・個人差の調整効果を含めた検討
3. 学会等名 日本社会心理学会第59 回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Li, Y., & Numazaki, M.
2. 発表標題 Does Resource-Holding Potential Shape the Relationship between Semantics and Social Behavior? A Trail of Laboratory Measure
3. 学会等名 International Convention of Psychological Science, Paris, France. (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Nakai, A., & Numazaki, M.
2. 発表標題 Economic recessions moderate the relationship between the cause of the achievement and malicious envy.
3. 学会等名 The 29th Annual Convention of Association for Psychological Science Boston(USA) (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Li Yifei・沼崎誠
2. 発表標題 「攻撃」に関するプライミングが自動的な社会的行動に与える影響
3. 学会等名 日本社会心理学会第62回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 朴建映・沼崎誠
2. 発表標題 外見に注目することが潜在的自己ステレオタイプ化に及ぼす効果
3. 学会等名 日本社会心理学会第64回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Park, K., & Numazaki, M.
2. 発表標題 Focusing on one's appearance increases implicit gender self-stereotyping.
3. 学会等名 The 25th annual Society of Personality and Social Psychology annual conference (Virtual) (国際学会)
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 沼崎 誠	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ちとせプレス	5. 総ページ数 304
3. 書名 ジェンダー 北村英哉・唐沢穰 「偏見や差別はなぜ起こる？」所収	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	天野 陽一 (AMANO Yoichi) (90571886)	東京都立大学・人文科学研究科・助教 (22604)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	松崎 圭祐 (MATSUZAKI Keisuke)		
研究協力者	中井 彩香 (NAKAI Ayaka) (51005335)	東京都立大学・人文科学研究科・博士研究員 (22604)	
研究協力者	李 イヒ (LI Yifei)	東京都立大学・人文科学研究科・博士後期課程 (22604)	
研究協力者	朴 建映 (PARK Kunyoung)	東京都立大学・人文科学研究科・博士後期課程 (22604)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関